2022 年 10 月 1 日号

ビジネス・サポート 通信

第 65 号（全 26 ページ）
（発行者）特定非営利活動法人 ビジネス・サポート
〒107-0052 東京都港区赤坂八丁目 1 番 9-701 号
TEL＆FAX: 043-376-1415
e メール：npobs321@gmail.com
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ：https://npo-bs.info/

（ 目 次 ）

【NBS の活動についてのお知らせ】 …… 2 ページ
・2022 年度 第 2 四半期 活動報告
・2022 年度 第 3 四半期 活動予定
・伝言板コーナー

【連載コラム】
「手話のポテンシャル」 …… 4 ページ

【NBS 会員 投稿作品】
《小説》 戦いすんで
—ある海軍兵士の生涯— ……10 ページ

注記）「NBS 第 48 回 21 世紀中小企業勉強会」の講演レジュメは、
NBS のホームページの『活動分野と実績』の項に掲載いたしました。
ご興味のある方は、NBS のホームページをご覧いただきます様、
お願い申し上げます。

ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ：https://npo-bs.info/

NBS の活動についての御知らせ

◆ 2022 年度　第 2 四半期（2022 年 7 月～9 月）活動報告

◎「NBS 2022 年度 第 48 回 21 世紀中小企業勉強会」

開催日時　　2022 年 8 月 31 日(水) 15:00～

開催場所　　霞が関 商工会館 6G会議室

講師　　近藤 正幸 氏（開志専門職大学 学長特命補佐・教授）

演題　　「世界の頭脳活用競争の中での日本企業の戦略」」

講師からのコメント:「世界の頭脳活用競争の中での日本企業の戦略」

グローバル競争の中で企業は世界の頭脳をどのように活用して自社のイノベーションを推進していくかが重要な課題となっている。本講演では、まず、日本企業が 2000 年代半ばから海外に居住する発明者だけによるイノベーションを急激に活発化させ、他の先進国と互いに相手国の頭脳の活用がどのようになっているかを論じる。次に、世界のイノベーションの重心がアジアにシフトする中で、日本企業が米独などの先進国の企業と比較して、中国、インド、タイなどの現地の頭脳をどのように活用しているかを明らかにしている。

****

◆ 2022 年度　第 3 四半期（2022 年 10 月～12 月）活動予定

◎「NBS 2022 年度 秋季講演会」

開催日時　　2022 年 11 月 7 日(月) 15:00～

開催場所　　霞が関 商工会館 6G会議室

講師：植嶋平治 氏（東北メディカル学院 専務理事）

演題：『医療介護分野での協同組合機能のポテンシャルについて

～中小企業の医療介護分野展開には協同組合機能活用がお勧め～』

【講師からのコメント】

一般企業の経営と医療介護の経営の大きな相違点は、前者が基本的に自由競争が前提の市場からの収入を源としているのに対し、後者は社会保障を基本とする政府の政策を収入の対象としている点である。また前者は自由に事業展開できるが、後者は認可が基本で参入障壁により保護されているが制約も多い。したがって、かつて医療介護分野では認可されれば公定価格で収入が確保され、企業経営の感覚では考えられないほど杜撰な経営が可能であった。

しかし、高齢化の影響で社会保障が増大し、財政負担が急増していることから、診療・介護報酬削減のため、例えば病院や施設を使わない在宅での医療や介護にシフトさせたり、また得意分野のない病院や介護施設が淘汰されるよう、報酬基準変更による政策誘導が行われ始めている。

その中で政府が打ち出したのが地域で医療や介護をそれぞれの得意分野で分担・連携させ、ベット数の削減などを目的とした地域医療連携推進法人（非営利型一般社団法人）の設置である。これは米国の非営利型ホールディングカンパニーである IHN（Integrated Healthcare Network:統括ヘルスケアネットワーク）を模したものである。

この点。私は地域医療連携推進法人としてIHNを模した持株会社の変形である一般社団法人方式より、共同事業として民間の力を引き出しやすい事業協同組合方式が我が国では相応しいと考えている。今回のセミナーではこの方式を筆者の勤務する「東北医療福祉事業協同組合」を事例に考察するものである。

医療介護といった地域やコミュニティーに基盤をおいた事業を、米国モデルの持株会社方式で展開するのか、欧州に淵源が求められる協同組合方式で展開するのか、これからの医療介護事業の成否を決めるかもしれない。

◎「NBS 第 49 回 21 世紀中小企業勉強会」

＊開催の詳細が決定次第、お知らせいたします。

≪伝言板 コーナー≫

NBS からの “お知らせ” を掲載するとともに、会員の皆様からご提供いただいた“情報”を掲示いたします。

“知らせたい情報”・“お役に立つ情報”などなど、会員の皆様のからの「情報提供」をお待ちしています。

〔連絡先：NBS 事務局 橋本 宛〕

■今回の「ＢＳ通信第 65 号」では、NBS 会員の植嶋様の「連載コラム」に続き、NBS 会員からの投稿作品を掲載いたしました。

今回は通常とは異なり、『文芸作品(小説)』を掲載しています。

NBS の通常活動とは直接関係しませんが、『芸術の秋』ということも有り、親しみやすい『誌面』作りという視点で試験的に掲載させていただきました。

また、次回の『BS 通信』には、会員企業様のご紹介記事等を掲載させていただきたいと考えています。いずれにしましても、当誌の誌面を NBS 会員の皆様に広く開放し、誌面の充実を図りたいと考えていますので、会員の皆様の一層のご協力をお願い申し上げます。

****

“NBS からの お報せ”

■ＮＢＳでは新規の会員の方を、随時、募集しています。

会員の皆様には、お知り合いの方で NBS の活動にご興味をお持ちの方がおられましたら、是非、ご紹介をお願いいたします。

・お問い合わせ、ご質問等 は 事務局 担当 ： 橋本 まで、ご連絡ください。

☎ 090-9304-3108

E-mail〈hashimoto.13530.shizu.sakura@catv296.ne.jp〉

【連載コラム】

手話のポテンシャル

元青山学院大学経済学部非常勤講師
鎌倉マネジメント・ラボ
所長　植嶋平治

先月 23 日は「手話言語の国際デー（International Day of Sign Languages）」であった。これは 2017 年国連総会において、手話言語が音声言語と対等であることを認め、国連加盟国が社会全体で手話言語についての意識を高めるための行動をとるが決議されたことに基づく。因みにこの 9 月 23 日は 1951 年にWFD世界ろう連盟 World Federation of the Deaf（WFD）が設立された日にあたる。

手話は、あらゆる情報を即座同時に伝え、受け取る技法である。とりわけ日本手話は、デジタル化で軽視されかねない人との温もりある関係性を担保しながら、アナログでありながらも、デジタル的な高速大容量のコミュニケ―ションが可能である。本稿ではろう者への理解を深めることはもちろん、手話が有するポテンシャルに注目し、手話がもたらす新たなコミュニケーションの可能性に迫る。

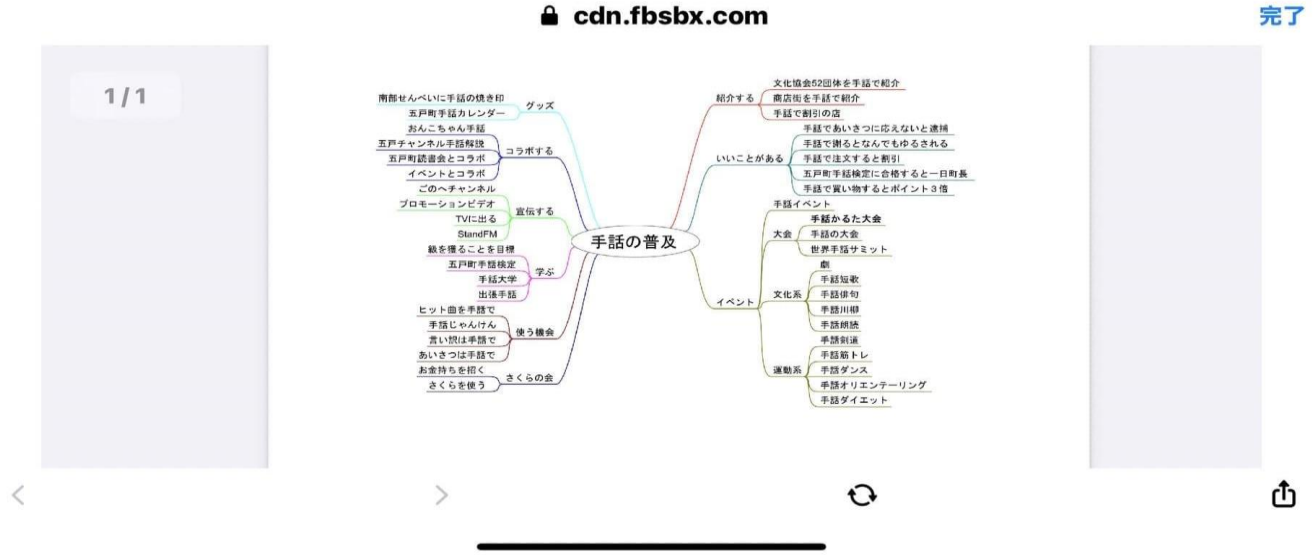
■ブレストと手話

さて青森県三戸郡五戸町にある東北メディル学院が私の職場である。この学校は、理学療法士や作業療法士養成の専門学校で五戸町に設立され、約 20 年の歴史を有する。一方この五戸町はご多分に漏れず少子高齢化が進み、若者をいかに街中に呼び込み、活性化させるかがが大きなテーマとなっている。私がこの学校に来て既に 3 年が経過した。その間、町内唯一の高校も閉校となり、中学以降の若者の集団としては、当学院のみがその存在となった。250 名という当学院の学生が、どう貢献できるかが五戸町の活性化の鍵となっているといっても過言ではない。

そのような中、私が関与している鎌倉で生まれたまちづくり活動の「カマコン」を五戸でも学生も巻き込み開催することになった。名前はカマコンにちなみ「五之魂」、活動の内容は、前回の寄稿でも紹介したように、まちの活性化にかかる様々なアイデアをブレーンストーミング（ブレスト）で生み出し、実行に移してゆこうというものである。コロナ禍で開催が何回も見送られる中、いままで 3 回開催、8 テーマについてブレストが行われた。

前置きが長くなったが去る 5 月「五之魂」第二回のテーマで、町の手話サークルの人達が「五戸町を手話の街にしたい」とのプレゼンを行い、ブレストを行った。これ以外に第二回五之魂では2テーマあり、参加者約 25 名が夫々のテーマに 7～8 名ずつ分かれブレストを行った。手話のテーマにはろう者の方が過半数を占め、手話サークルの方が通訳された。なお、この手話以外のテーマのブレストチームにはろう者の方は入っていない。注目すべきはそのアイデアの数である。手話以外のろう者の入らないブレストチームのアイデア数が 20～30 程度であったものが、手話のチームでは 40 を超えるアイデアが出たことだ。（注1）この数の差は一体何を意味するのだろうか？

（注1）五之魂：「手話のまち五戸にするために」のブレストアイデア



一方で既に五戸町では今年４月から、手話を言語として認める手話言語条例が施行された。また５月にはブラジルで開催された第 24 回夏季デフリンピック（別添参照）競技大会陸上競技男子 100 mで五戸町出身の佐々木琢磨氏が日本人初の金メダルを獲得し、町では祝賀行事が開催された。とりわけ私の手話への関心を深めたのが若宮五戸町長による手話での祝辞であった。町長が「佐々木さん金メダルおめでとう」と手話で表現された際、右手を背中から振り上げる格好で金メダルに輝く佐々木選手の名前を表現されたのだ。手話で「佐々木」は「佐々木小次郎」の剣術のスタイルが語源（注1）であるとの町長の解説に、私は俄然手話に興味を持つことになった。そこに先月の「手話言語の国際デー」である。様々な媒体で手話に触れる機会が多くなった。

（注1）「佐々木」を手話で表現：片手を背中の方に回し、背中に携えた刀を抜くようなジェスチャーをして表現。佐々木小次郎が刀を抜く様子。
NHK動画参照（日本手話で猫　NHK　手話CG）
https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=4140

■手話は言語のひとつ

さて、「手話言語の国際デー」や「手話言語条例」が何故制定されたのか？ろう者のコミュニケーション手段として、かつてろう学校でコミュニケ―ションツールとして主に教えるのは「口話法」といって、聞こえない人にも声を使って会話ができるようにすることを目指し，またそれを手がかりに日本語を身に付けられるようにする、といったものであった。手話は禁止されていた。これは日本だけでなく世界的にその傾向があった。手話の使用を認めると、ろう児は厳しい口話法の訓練よりも手話に流れてしまい、口話法による日本語の獲得ができなくなる、との考え方によるものであったらしい。ただ、実際のところは、手話を禁止し、そのような厳しい訓練を行ったとしても、口話法によって日本語を獲得することは困難であった。また、ろう学校が手話を禁止し続けてきたにもかかわらず、ろう者はろう者同士の中で手話を使い続け、次代に伝承してきた。そして、近年手話には音声言語の音韻に相当する構成要素があることなどが発見された。日本において、手話が日本語とは異なる統語規則を持った言語であることが知られるようになったのは、1990 年代中頃になってからである。

つまりかつては手話は言語でなく、話言葉より劣ったものとみなされていたものが、言語としての市民権を最近になってやっと得ることになった。それを広く国民に認知されることを目的で制定されたのが先の「手話言語の国際デー」や「手話言語条例」であった。

■手話の種類

手話には大きく分けて、日本語対応手話と日本手話の二つがあり、日本手話は幼い頃から聞こえないろう者が中心となって使い、日本語対応手話は主に難聴者や日本語獲得後に失聴した人に使われている。

① 日本語対応手話

日本語を，音声でなく，手指で表そうとするもの。「口話教育では聾児に日本本語教育をしたらどうか」という発想で，昭和 45 年頃から栃木県立聾学校で「同時法」として，手話を使った聾教育が始まった。幼稚部から，小学部3年までは指文字，小学部4年から日本語に対応した手話を導入していくという方法。日本語対応手話（同時法手話）では，語順は日本語の語順にあわせ，助詞や助動詞は，指文字や手話と口形できちんと表す。語彙は日本語の単語を対応させて使う。

② 日本手話

日本手話は，手や身体を使って空間に表される言語である，目で見て受け入れる言語であるという手話の特徴を最大限に生かして文法関係を組み立てて，日本語の文法や語彙とは別の独立した体系を持っている。日本手話という言い方は「聾者の用いる手話は，音声言語に匹敵する，複雑で洗練された構造をもつ言語である」という主張を含んでいる。

（出所）秋田県
http://www.kagayaki.akita-pref.ed.jp/chokaku-s/rouguideEX/communication/comu01.html

■手話 vs 話し言葉

さて、先ほどのブレストの謎である。ろうの方は、ろう通訳付きで、日本手話を使ってのブレストであった。

ではブレストでなぜ手話チームのアイデア数が多かったのか？先ず今回のブレストチームを分析しよよう。通常チームによって差が出るのは、ブレストの経験値やチームをリードするファシリテーターの手腕に依存するところが多く、またブレストテーマにも左右される。第二回の「五之魂」では 3 チームに分かれ、①チーム毎にテーマが異なる、②参加者のブレスト経験はほぼ初心者、③訓練されたファシリテーターは存在しない、④一チームだけにろう者が手話で参加。3 チームの条件は①と④を除き同じでであるが、決定的に異なるのは手話をテーマにブレストしたチームだけ、手話を使うろう者と通訳など手話関係者が過半数をしめている点で、そのチームのアイデア数が抜き出ている点だ。

これは話し言葉と手話の違いに大きく依存するようだ。話し言葉をつかう参加者については、特にブレスト初心者は話し言葉で思考をめぐらし、価値あるアイデアか？はたまた、ないアイデアか？を考え抜いた上で発語する。さらにそれもアイデの解説を付した、話し言葉で発語することが多い。これに対し手話での参加者はアイデアを画像処理するように瞬時に表現している。これは話し言葉のブレスト熟練者と同様の手法である。

ここで手話言語がどのような言語であるのか，研究者の論文を引用し考察しよう。「音声言語（＝話し言葉：筆者補完）では，音素が時間軸上に配列され，継時的に単語が形成されることが知られており，その特徴は線状性とよばれる．一方，手話言語は，非常に複雑な音韻構造をもっている．手話言語の場合，要素の継時的結合と同時的結合が複雑に絡み合った構造になっている.手話言語の音韻とは，手話単語を表す際の「手型」，手指の「運動」，手型が表出される「位置」の 3 要素をいい，これらが同時的に結合し，1 つの単語が形成される（Stokoe, Casterline, Croneberg, 1965）．手話単語の音韻的構造について，下図に示した．例えば，{ネコ}という手話単語は，握った手で頬をこするネコの仕草によって表される．この単語は，握った手（S 手型）という「手型」と，手首を屈伸させるという「運動」と，この運動が行われた頬という「位置」の 3 つの要素（音韻）に分解でき,「手型」,「運動」,「位置」の 3 つの要素が同時的に結合することにより{ネコ}という単語ができる．（注2）そして，このような音韻的構造をもつ手話単語が時間軸上に継時的に配列されることにより，手話の文が構成される。」（注3）

（注2）NHKが編集した手話での{ネコ}の動画をサイト参照。
動画（日本手話で猫　NHK　手話CG）
https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/enquete.cgi?dno=1825

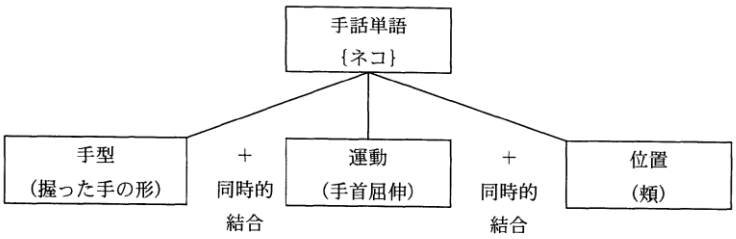


図 1　手話単語の音韻構造

（注3）武居渡『言語の写像性は言語獲得を促進させるか:手話獲得研究からの知見』「コミュニケーション障害学 23, 143-151（2006）特集 ＜コミュニケーション障害と発達心理学の接点＞」
つまり、話し言葉では言葉が時間軸上に並ぶ線状性と呼ばれるのに対し、手話では言葉の全ての要素が映像のように一度に表現されるという違いがある。

■日本手話

（出所）日経新聞
「イメージつたえる記憶の言語」2022.7.3 付け

さらに手話の中でも日本手話では、手や指の形、動きとともに、視線、顔の表情、首振りなどの非手指動作（NMM= Non-Manual Markers）が文法の核心部分を担っている。そのため、顔の表情は感情を表現するためだけではなく、文法の一部として言語に組み込まれている。（左図参照）また、CL（Classifier）と呼ばれる、ジェスチャーを文法化したような技法があり、目で見たものの状況を言語化し再現することに優れているといわれている。日本で初めて日本手話を第一言語として教える明晴学園の校長を務めた斉藤道雄氏によると、「 たとえば日本語で『ボールが地面をはね返った』というのを、手話ならどんな大きさのボールがどれくらいのスピード、角度でどの方向にはねていったのか、瞬時に動画のように表現します。だからこそ、ろう者は、そのような表現ができない音声語を『もの足りない』と思うようです。」と述べている。（注4）

また斉藤氏によると、ろう者の寄宿舎でのエピソードとして、仲間でお金を出し合い、じゃんけんで勝ったものが代表して映画を鑑賞し、帰って手話で映画を臨場感あふれるように仲間に再現したという。

（注 4）五十嵐大 「手話は描写力にすぐれた少数派の言語。その豊かな世界」

https://note.com/torus_abeja/n/nb48640a5f0ca

■手話のポテンシャル

ブレストでのアイデア出しでは、解説的になりがちな初心者の話し言葉でのブレストに対し、ブレスト初心者ではあるが、手話で瞬時にアイデアを表現できる、ろう者のブレストが優位であったのだ。
私はこの手話でのブレストの場面で見て、手話が言語でありながら話し言葉では限界のある情報の量や質を表現できる可能性があるのではないかと直感した。同じことを国立民族学博物館の菊澤律子氏は、言語の線上性から話し言葉では二つの音を同時に発声できないが、「手話の場合には、手の動きだけでも 2 系統あり、そこに口型や頭の振り、顔の表情などが文法要素として加わると、片手で継続する状態を表しておき、もう一方の手で出来事を表現することなども可能」としている。（注5）
このように手話は、ろう者の言語としての機能を果たすことは分かっているが、どうも、手話で見えてくる新たなコミュニケ―ションがあるようだ。

ろう者は 300 人に一人といわれているが、手話は、ろう者だけの言語でなくいわゆる聴者側にいる話し言葉の使い手としても、ろう者とのコミュニケ―ション以外の目的で修得していく時代が来るのではないか。

現在コロナ禍でテレワークなどオンラインによるコミュニケーショが一気に広がりを見せているが、対面のような相手との空気観をはかりながらの対話が難しくなっているといわれている。このような時こそ手話から学ぶことは、先ずろう者が相手の表情をしっかり捉える技法、そして相手に自分の意志をしっかり伝える豊かな表情の技法である。

しかしそれだけではない、手話のもつあらゆる情報を即座同時に伝え、受け取る技法に注目したい。とりわけ日本手話は、デジタル化で軽視されかねない人との温もりある関係性を担保しながら、アナログでありながらも、ろう者の技量レベルにもよるが、デジタル的な高速大容量のコミュニケ―ションが可能である。そのようなに考えると、手話という言語にはこれからますます活用されるポテンシャルがあるのではないか。

先ずは義務教育の場で、手話を英語など第二外国語と同じ位置づけで履修できるようにし、手話やろう文化への理解を深めることから始めるべきだ。また、社会人としてのコミュニケーション力強化のため、企業研修での手話講座の導入などが今後必要であろう。手話がこれからの人間社会に大きく貢献してゆくことは間違いなさそうだ。

(注5)菊澤律子(国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授)「手話は言語である」の一歩先へ：機関研究 ：「マテリアリティの人間学」領域　手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生（2013-2015）
https://minpaku.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=625&item_no=1&page_id=13&block_id=21

【別添】
〇デフリンピック

身体障害者のオリンピック「パラリンピック」に対し「デフリンピック Deaflympics）」は、ろう者のオリンピックとして、夏季大会は 1924 年にフランスで、冬季大会は 1949 年にオーストリアで初めて開催されています。障害当事者であるろう者自身が運営する、ろう者のための国際的なスポーツ大会であり、また参加者が国際手話によるコミュニケーションで友好を深められるところに大きな特徴があります。(中略)

パラリンピックとデフリンピック

国際パラリンピック委員会(International Paralympic Committee)が 1989 年に発足した当時は、国際ろう者スポーツ委員会も加盟していましたが、デフリンピックの独創性を追求するために、1995 年に組織を離れました。そのために、パラリンピックにろう者が参加できない状況が続いています。なお、デフリンピックの独創性とは、コミュニケーション全てが国際手話によって行われ、競技はスタートの音や審判の声による合図を視覚的に工夫する以外、オリンピックと同じルールで運営される点にあります。また、パラリンピックがリハビリテーション重視の考えで始まったのに対し、デフリンピックはろう者仲間での記録重視の考えで始まっています。しかし、現在は両方とも障害の存在を認めた上で競技における「卓越性」を追求する考えに転換しています。(なお、2025 デフリンピックの開催地が東京に決定)
(出所)
一般財団法人全日本ろうあ連盟 スポーツ委員会
https://www.jfd.or.jp/sc/deaflympics/games-about

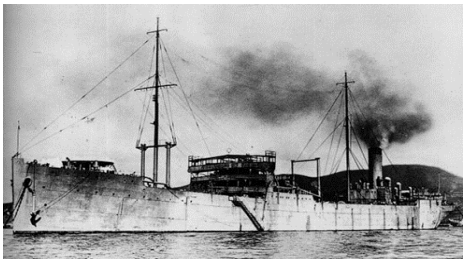
《小説》戦いすんで
―ある海軍兵士の生涯―

一宮 純 著

この小説は海軍の一兵士として十年余りの歳月を従軍し、戦後もその時代に培った信念を支えとして生きた一人の人間の生涯を綴ったものです。なお、作中の出来事は全て、実際に起こった事実に基づいていますがプロットの細部は作者の創作によるものです

＊この小説は十四章から成っていますが、当誌には第七章だけを掲載しています。

〔停泊中の特務艦 早鞆〕



第七章 雷撃

（プロローグ）

昭和十八年十月九日の払暁、ボルネオ島東方五十キロの海上に黒い船影が突如姿を現した。全長凡そ百メートル、細く尖った船体は中央の艦橋と思われる部分以外、甲板後部に小口径の大砲が一門見えるだけで、船上には人の気配もない。特に周りを伺うでもなく、十五ノットほどの速さでほぼ南を指して一直線に進んでいる。

開戦から二年近くが経過し、太平洋戦争の趨勢も、ようやく日本軍の敗色が明らかになりつつあった。先月の半ばには、日本軍のオーストラリア方面攻撃の主要基地で有るパプアニューギニアの州都ラエが米軍に奪回され、更に今月には、日本海軍の南方の拠点ラバウルへの侵攻も噂されていた。

ハッチから出てきたのか、艦橋に二つの人影が現れた。二つ共に士官の装いである。一人が双眼鏡で周囲を確認し、満足気に頷きながら傍らの一人に話しかけた。

「副長、昨日発見した敵船は、その後航路を変えていないだろうな。」

「ローレンス艦長、確実にレーダーで捕捉していますから大丈夫です。昨日の日没時に発見して以降、凡そ十五マイルの距離を取って並行に進ん

【特務艦 早鞆 基本情報】

艦種　運送艦（給油艦）
級名　隠戸型 二番艦
進水　大正十年十二月四日
除籍　昭和二十一年五月三日（同年 海没処分）
常備排水量　公表値 15,400 トン
全長 143.48m、 最大幅 17.68m、 吃水 公表値 8.08m
ボイラー　宮原式水管缶 6 基
主機　3 段膨張式蒸気機関
速力 15.5 ノット、公表値 12 ノット、経済速力 7 ノット
燃料　石炭満載 1,596 トン *他に 庫外 610 トン
重油 1,274 トン
航続距離 7,890 カイリ / 8 ノット
乗員　公表値 160 名
搭載能力　重油 8,375 トン、
他に獣肉、魚肉、野菜、氷の各冷蔵庫
兵装　50 口径 14cm 単装砲 2 基、
40 口径 8cm 単装高角砲 2 基
搭載艇　内火艇 1 隻、カッター2 隻、通船 1 隻
注）日本海軍の戦闘時に各艦艇に燃料を補給する為に作られた給油艦。太平洋戦争の開始前には、特殊任務として、米軍のサンディエゴ基地への石油の買い付けにも派遣されていた。（当小説 第六章）

でいます。先ほどは試しに潜航してソナーでも敵船の波長を確認したので、水中からの攻撃でも確実に魚雷を命中させられます。」
「では、今日の午前中が勝負だな。それも十時前には一発、お見舞いしてやりたい。天気は快晴の様だし、逆光を利用して太陽を背に出来るだけ近づき、十マイルを切った辺りで潜航して、確実に仕留めるぞ。」
「了解です。それにしても、日本軍の輸送船は護衛が付くでもなく、まして単独行での航行もしばしば見られるなどというのは、二年ほど大西洋でドイツ相手に戦って来た小官としては何とも理解しがたい話です。」
「ジュークス大尉、それはそれとして、奴らを甘く見ると火傷するぞ。君の赴任前だが、この艦も今年の三月に台湾沖で十六時間に亘って敵の爆雷攻撃を受け、その結果、本土に回航して二ヶ月に余る大規模修理を行った。実際に推進機が損傷し、オイルが漏れて海上に浮かんだ為、怪我の功名と言うか、それを沈没の証しと考えた敵が爆雷攻撃を止めてくれたお蔭で、危ないところを何とか逃げおおせた。正直、もう少しで沈没するところだった。そんな、危ない橋を渡るのは、もう二度とご免だよ。」
「小官はアナポリスで、日本海軍の駐留武官と話す機会が有りましたが、結構、優秀な軍人でした。個人的には日本軍の士官はそれなりに優秀だと思うのですが、何故に日本軍の戦略はこんなに稚拙なのでしょうか。」
「思考が未だに主力艦同士の海上決戦のイメージから抜け出せていないのだな。言わば中世の槍試合の発想だ。華やかに武功を挙げることが第一で、冷徹に戦争というものを見つめ、泥臭くても戦争に勝利するというリアリズムを持っていない。戦闘相手は先ず軍艦、それも大型で有ればそれに越したことはないと考え、戦いに華々しさを求める結果、輸送船などは攻撃対象として考えていない。逆に自分たちの輸送船を襲う我々などは無頼の輩で、海軍ではなく、海賊レベルの集団とでも考えているんだろう。」
「だから、われわれに軍人としての矜持が有れば、日本軍の輸送船などは狙わないということですか。何とも時代遅れの考え方ですね。おめでたいというか、本艦など、今回のパトロールの第一目的は諜報員の輸送でしたし、もともとは通商路の破壊が本艦の主要任務です。しかし、奴らにそんな発想は丸っきり無いのでしょうね。」
「そう言えば、サバに送り届けたチェスター中佐たちはどうしているだろう。無事に現地人たちと連絡が取れていれば良いのだが。」

先月の九月二十四日、アメリカ海軍の潜水艦キングフィッシュ号（SS-234 水中排水量 二、四一〇トン）は母港である西オーストラリアのフリーマントル港を出港し、南シナ海方面に向かった。これが、就航から数えて五回目の哨戒任務である。但し、今回は通常の通商破壊活動の他に、特に二つの特別任務が課せられていた。
一つはセレベス島の南部に機雷を敷設すること、もう一つはボルネオ島北東部にオーストラリア陸軍のF.G.L.チェスター中佐以下六名の将校を、彼らの任務である諜報・後方攪乱活動のための必要物資五千ポンドと一緒に揚陸することであった。出港後、キングフィッシュ号は先ずボルネオ島東岸を北上し、三日前の十月六日未明にチェスター中佐たちを予定したボルネオのサバ州の上陸地点に送り届け、また新月の闇に紛れて委託された物資を揚陸することも、無事に成功させていた。
その当時、米軍は翌十一月にも、南太平洋を島伝いに日本本土に向けて進攻する本格的な反攻作戦を発動する計画であった。そして、それに続く作戦として、一年後にはフィリピンの奪還を成功させる為、その進攻時に腹背から攻撃されない手立てとして、オランダ領東インドのセレ

ベス島及びボルネオ島における、反日本軍活動の現地組織作りを開始したのだった。

◇ 十月九日　午前六時　日本海軍　特務艦　早鞆

起床ラッパが鳴った。総員起こしである。ハンモックを手早く片付け、百数十名の兵士が急ぎ足で洗面所やトイレに向かった。林一等兵曹も洗面を済ませると、食堂の奥にある「酒保」に向かった。今日は週末なので朝食を挟んで一時間だけ「酒保」を開き、その後で月次の帳簿を整理する日だった。

林の元々の任務は機関兵曹で有るが、仕事が手堅く、また、それに加えて本人が酒もタバコもやらない所から、この艦（特務艦　早鞆）の酒保の実務管理も合わせて任されていた。そして、午前九時からはマニラで乗艦した補充兵四名を機関室に伴い、機関現場の作業手順を教えた上で、実際に現場の作業をさせるのが、今日の予定だった。

◇ 十月九日　午前七時　特務艦　早鞆　艦橋甲板

艦橋甲板では夜間の哨戒直の兵士が早番への引き継ぎを行っていた。

「夜間哨戒中に、何か気になることは無かったか。」甲板士官掌機長の村上兵曹長が夜間直の高嶋兵曹に尋ねた。

「何も有りません。何か気になることでも有ったんですか。」逆に高嶋兵曹が聞き返してきた。

「うん、どうもまだ気になっているんだが、昨日の夕刻、遅番の連中が左舷横の遠くの海上に、何か反射する物が見えた気がする言っていた。それも確実な話ではないんだが、一瞬、何か光った様な気がして、双眼鏡でその辺りを確かめたが、結局、何も見えなかったと言うんだ。掌機長の西山中尉に報告はしたんだが、どうせビンかなにかが浮遊していて光ったんだろうと言った後、いい加減な話で騒ぐんじゃ無いと、逆に叱責された。その為、昨日の深夜番への引継ぎでも、その話はしなかったんだが。」

「そうですか。シブツ海峡を抜けたこの辺りは、警戒するに越したことはないんですがね。どうも中尉殿は、ご自分の意見に反対する者は徹底的につぶしにかかりますからね。後でそんな引継ぎをしたと聞かれたら、藪蛇ですよね。」

◇ 十月九日　午前八時　特務艦　早鞆　艦橋前

艦橋前に各科の当番下士官が集められ、その日の業務確認が行われた。

相変わらずと言うか、艦長の長谷部大佐からは、この日も特段の指示は行われなかった。兵科の分隊長立花中尉が、艦長に代わり各科の報告を受け、今朝もいつもの様に短時間で解散した。

「林、この後は補充新兵の教育か。」同じ機関科の吉積二等兵曹が林に話しかけてきた。

林と吉積は同じ村の出身で、同じ小学校に通った幼馴染であった。その為、吉積は、今では階級が一つ上の林ともため口で話していた。二人は同じ年に徴兵で海軍に入隊したが、一年に数千人が入隊する第三艦隊では、現場の配属が異なるのは当たり前である。しかし、不思議な縁とでも言うべきか、昨年吉積が特務艦早鞆に転勤して来た為、僅か百六十人程度が勤務する艦の同僚として、六年ぶりに出会ったのだった。もっとも、林は昇進が普通よりも早かった為、星の数は林が吉積より一つ多くなっていた。

「ああ、九時から半日仕事になるかな。新兵と言っても、結構臺が立っているから、現場の力仕事でどの程度役に立つか、心配だがな。下手をすると俺たちより年上もいる様だぞ。」

「そう言えば、お前、酒保の帳簿整理も有ると言っていたよな。何なら今日は俺が変わってやるぞ。その分、井上主計大尉には吉積が助けてくれたと言っておいてくれれば良いから。」
「ははは。お前、井上大尉とは飲兵衛仲間だからな。しかし、それだとお前は連続直になって、身体がきつくないか。」
「今日で直が変わるから夕食後には寝られるし、大丈夫だよ。まあ、実際に石炭をくべるのは、若手の仕事だしな。」
「悪いな、吉積。それじゃ、今日だけは言葉に甘えるよ。その代わりお前が教育当番の時は俺が代わるからな。」
「そんなに気にする話じゃないよ。もっともお前は昔から律儀だからなあ。」

◇ 十月九日　午前八時五十分　特務艦　早鞆　酒保カウンター
「じゃあな。」吉積が金網越しに酒保を覗き込み、唐突に敬礼をして「吉積二等機関兵曹、ただいまより勤務に就きます。」と言い、ニャっと笑って甲板に上がって行った。
そしてこれが、林が生きた吉積を見た最後となった。

◇ 十月九日　午前九時十分　潜水艦キングフィッシュ
「ジュークス大尉、潜航を開始するぞ。」
「はい、ローレンス艦長。敵艦は十ノット程の早さですから、接近するのは簡単です。朝の間に斜め前方に位置取りしましたので、ソナーで確認しながら左周りに接近します。」
「船首と船尾に中口径の砲が見えるが、それ以外には大した装備は無さそうだし、軍艦としては不思議な形だな。民間のタンカーを徴用して艤装したのでもなさそうだが、煙突の位置から考えるとタンカー仕様の輸送船だな。爆雷ぐらいは積んでいるだろうが、速力は当艦でも振り切れそうな程度だ。図体がデカイから仕留め甲斐が有るぞ。」

◇ 十月九日　午前九時三十五分　潜水艦キングフィッシュ
キングフィッシュは既に予定通りに潜航し、早鞆への攻撃態勢を整えていた。
「敵艦まで残り五マイル」艦橋の中で測量士が告げた。
「前方魚雷発射管を開け。魚雷は六門全部に充填しているな。先ず、左右それぞれ外側の発射管から一発ずつ発射し、四門連続で発射したら右に反転し、潜航しながら避退するぞ。二門は予備攻撃用に残しておけ。」ローレンス艦長が攻撃方法を確認した。
「残り三マイル」
「潜望鏡挙げろ。良し、敵艦の側面にドンピシャだ。」
「敵艦まで残り二マイル」
「残り半マイルで発射だ。」
「敵艦まで残り一マイル」
「発射 !!」
ズンという衝撃と共に二発の魚雷が発射され、
「続けて発射 !!」
さらにもう二発が発射された。
「右反転 ! 急速潜航 !」
キングフィッシュが早鞆の左舷二百メートルほどの海中を、すれ違う様に急速潜航に移った時、後方からガァーンという衝撃音が響いてきた。
「やったぞ。」
「二発、命中です。」ソナー手が告げた。
「爆雷の投下は有りません。」

「良し！いいか、五マイル離れたら一度浮上し、戦果を確認して再潜航するぞ。」

◇ 十月九日　午前九時五十分　特務艦早鞆　艦橋

艦橋に併設した望楼から、突如、哨戒中の兵が叫んだ。「左舷十時、魚雷接近！」

「取り舵いっぱい！」操舵室で村上兵曹長が叫ぶと同時に、右隣に立つ西山中尉を見た。

望楼からは叫び声が続いた。「航跡は四本！接近中！左舷三百メートル。」

「警戒警報！」村上兵曹長が続けて叫んだ。

「間に合わん。」西山中尉が通信制御盤の横棒をぎゅっと握りしめたまま、つぶやいた。

◇ 十月九日　午前九時五十二分　特務艦　早鞆　兵士食堂付近

けたたましく警戒警報音が鳴り響いた。

林は酒保から駆け出し、そのまま甲板に駆け上がった。

とたんに、左舷後方からの「ドッカーン」という大きな爆発音とともに、船が左右に大きく揺すられ、林は前方に投げ出される様に、甲板に叩きつけられた。思わず、左手で頭をかばい、腹這ったまま右手で横に有ったロープを掴んだ。何秒も経っていないのだろうが、次第に揺れは治まって来た。

「吉積。」林は急いで後部の機関室に走った。船尾からは機関兵が逃げ出してきた。中に、部下の長尾の顔が見えた。

「長尾上等兵、やられたのは何処だ。」林は長尾を捕まえて、大声で聞いた。

「左舷の機関室であります、兵曹。」長尾は魚雷の恐怖が残っているのか、緊張した声で答えた。

「吉積を知らんか。」

「吉積兵曹殿は左舷機関室におられた筈です。新兵二名と一緒に機関を動かしていました。」

そして、再び駆けだそうとする林の腕を掴んで、「左舷機関室はもう水没しています。」と続けた。

「機関室に降りるタラップは、階段の上のハッチが閉じられました。」

「そんな。まだ生きているかも知れんぞ。」

「林兵曹。」後ろから誰かが声を掛けて来た。振り向くと二宮機曹長であった。

「左舷後方部は機関室区画だけを閉鎖して、他の区画への浸水を食い止めた。勿論、閉鎖前に機関室には大声で呼び掛けて、タラップまで来る猶予を与えた。浸水が拡大し他のボイラーまでやられたら、この船は自沈するしかなくなるのは解っているだろう。これ以上、被害を拡大させない為には、仕方のない処置だ。」

「そんな…」

「それよりも、十分後に艦橋甲板に集合だ。それまでに、急いで右舷の機関室も含めて、損害状況を確認し、集合時に報告しろ。いいな。」

言い捨てて、二宮は艦橋に向かった。

確かに機関現場の実務責任者は林と吉積の二名の兵曹が務めており、それを統括する二宮曹長（少尉相当職）の上司は機関長の久保大尉だけで有る。こうした緊急事態の場合に現場の状況を把握するのは、林が先ず行わなければならないことだった。

◇ 十月九日　午前十時十分　特務艦　早鞆　艦橋

「左舷八時の方向に潜水艦らしきものが浮上。距離八キロ！」望楼からの声が伝声管に響いた。

「一号砲塔を撃って、やっつけてやる！」西山中尉が顔を真っ赤にして怒鳴りながらタラップを駆け下り、艦首に向かって走り出した。
「西山！」長谷部艦長が追うように叫んだが、「言っても聞かんだろうな。」とつぶやいて、伝声管で望楼に「敵潜水艦の正確な方向と距離を測定しろ。」と命じた。

◇　同時刻　早鞆　左舷艦尾

「左舷艦尾の機関室付近に、何か見えるぞ。爆発でめくれた辺りに何か刺さっていないか。」左舷艦尾から身を乗り出すように損傷部を確認していた林兵曹が、一緒に損傷確認を行っていた長尾上等兵に話しかけた。「二枚目の防水隔壁と船尾材の間に見えるのは、あれは魚雷じゃないか。」
長尾上等兵も身を乗り出しながら左手を額にかざし、水面下に光線のために揺れて見える、林の言う魚雷らしきものに目を凝らした。
「まずいですね。潜って現物を確認しなければならないですね。いずれにしても右舷の推進機関も完全に停止させて、魚雷だったらクレーンで取り除いて海底に落としますか。」
「簡単に言うな。命がけの仕事だぞ。不発魚雷といっても、何時なんどき爆発するか知れたものじゃないぞ。しかし、あれが爆発したら左側の舵をやられるか、下手をすると右舷の推進軸も使えなくなるかも知れない。」
「兵曹、間もなく会議ですよね。私が潜って現物を確認しておきますから、船は完全停止させる様に艦長に報告願います。」
「あのおっさんも、こんな時くらいはまともに動いてくれるだろうなぁ。何しろ予備役大佐のロートル組だからな。」
「憎まれ口をたたいてないで、よろしくお願いしますよ。」

◇　十月九日　午前十時二十五分　特務艦　早鞆　艦橋甲板

艦首の一号砲塔が突如火を噴いた。早鞆は艦の任務上、訓練以外で砲弾を発射したことは無い為、砲塔にいた三人を除き、乗組員全員が驚いて艦首の方を見た。
林は艦橋に駆け上がり、「砲撃をすぐに止めさせてください。魚雷が爆発します。」と怒鳴った。
「何、魚雷だと。」
「敵の不発魚雷です。今、長尾上等兵が潜って状況を確認していますが、下手な振動を与えると、爆発の引き金になりかねません。」
「撃ち方止め、一号砲塔！長谷部だ。直ちに撃つのを止めろ！」長谷部艦長が伝声管で一号砲塔を怒鳴りつけた。「西山中尉には、直ちに艦橋に戻るように伝えろ。返答は無用だ！」
「さすがのおっさんも怒ったな。実際、西山のアリバイ作りの砲撃だからな。こんな距離で潜水艦に当たったら、おなぐさみだ。相手も一発飛んで来たら、すぐに潜って逃げるよ。」内務長代理の中村中尉がぼそぼそとつぶやくように言った。

◇　十月九日　午前十時二十五分　潜水艦キングフィッシュ　艦橋

「敵の様子はどうですか。被害の様子は解りますか。」ジュークス大尉が双眼鏡を覗くローレンス艦長に尋ねた。途端に敵船の船首の砲塔から火が出て、砲弾の発射音らしきものが伝わり、前方五百メートルほどの辺りに水柱が立った。
「当りはしないだろうが、急ぎ、潜航しろ。潜航後は進路を東に取り、五分後に南に向かう。」艦橋上部のハッチを閉じながら、ローレンスがジュークスに命じた。「沈没させられないまでも、かなりの損害は与えている。」

指令室に戻り、浅く潜航した位置から潜望鏡を覗きながら、ローレンスがジュークスに言葉を続けた。
「敵船はエンジンを完全に停止させたようだ。機関室にかなりの損害を与えたのだろう。沈没しないまでも、数か月は使い物にならない。後は次の獲物を探すぞ。」
一度出航すれば二ヶ月ほど続く哨戒任務では、これから一月半の間にまだまだ戦果を挙げる必要が有った。潜水艦キングフィッシュは次の獲物を求めて戦場を離脱した。

◇ 十月九日　午前十時三十分　特務艦　早鞆　一号砲塔

「何ですか、この騒ぎは。」一号砲塔の砲手森本一等兵が傍らの鹿島兵長に不満をぶつけるように話しかけた。「急に中尉殿が飛んで来て砲撃だと騒ぐので、大急ぎで一発撃ったら、途端に艦長からのお叱りの伝声管でしょ。」
「西山中尉得意のスタンドプレーさ。西山中尉はこの艦の兵科の実務責任者だからな。」鹿島兵長も苦虫をかみつぶすように森本一等兵に答えた。「今日の魚雷での損傷は、これまで哨戒任務をちゃんとやっていたのか、後で艦長から報告を求められるだろうし。それに、何の反撃もせず、魚雷を撃たれたまま敵に逃げられたなんて恥しい限りだからな。ただの輸送船ならまだしも、いやしくもこの艦は軍艦だぞ。」
「西山中尉殿は有能だと聞いていますが。」
「へえ、誰に聞いたんだ。」
「ご本人からです。海兵でも成績優秀だったと。」
「まあ、見かけはあの通りの六尺豊かな偉丈夫だし、押し出しは効く。話もそれなりに出来るしな。何か、海軍省のお偉いさんの娘に気に入られて、入り婿扱いで結婚したそうだ。もっとも、結婚しても苗字は変えていないそうだから、それがせめてもの本人の意地なんだろうな。」
「それなら、もっと経歴を誇れるような船に乗っている筈じゃないですか。」
「何か、前の艦で失敗をやらかして、この艦に転勤させられたという話を聞いたぞ。本人は早くその失敗を取り返して、もっと華の有る船に移りたいんだろうが、この艦じゃ手柄の立てようがないからな。」

◇ 十月九日　午前十時三十分　特務艦　早鞆　艦橋甲板

報告会議は予定通りに十時三十分に始まった。この艦の士官と兵曹長(少尉待遇)の、合わせて九人全員が集められたが、報告の為の参加者は林一人だった。自ずから話は艦尾の損害状況、それも林のもたらした「不発魚雷」の報告に集中した。
「それで、魚雷はどうするつもりだ。二宮機曹長。」長谷部艦長が機械部門の責任者の二宮に話を振った。
「クレーンで取り外して、海底に捨てましょう。魚雷からの安全確保が第一で、それができたら、左舷の機関部は使い物になりませんから、最寄りの港に寄って修理した方が良いと思います。ここからだとタラカンまで半舷走航でも五時間くらいでしょう。」二宮機曹長が答えた。
「魚雷を取り除いたら戦死した三人の遺体を回収して、軍艦葬をやりましょう。名誉の戦死ですし。不発魚雷の報告位置からすると、そのまま左舷機関室に繋がっているでしょうから、同じクレーンで遺体も回収できると思います。」中村中尉が付け加えた。
「わかった。それで実際に魚雷の処理には誰が当たるんだ。」長谷部艦長が質問した。
「林一等兵曹がやりますよ。死んだ吉積二等兵曹は林兵曹の身代わりで死んだようなものですから、林も進んで名乗り出るでしょう。なあ、林。」二宮機曹長が答えた。

「えっ。」林が驚いて二宮を見たが、「他の人間にやらせたら、吉積も浮かばれんぞ。」二宮は押し切るように林を睨みつけた。「その代わり、クレーンの操作は俺が責任を持ってやるから。」二宮が続けた。
「わかった。では、午後二時までには後始末を完了させてタラカンに向かうぞ。それなら何とか明るいうちに港の近くまで行って、無事に桟橋に接岸できるだろう。」長谷部艦長がしめくくり、会議は解散した。
艦尾に向かいながら、林は二宮の言いぐさにむかっ腹が立ったが、「落ち着け、落ち着け。」と、自分に言い聞かせた。他人に言われなくても吉積の死に水は自分が取るつもりだったが、それより先に魚雷の処理が有る。不発魚雷は元々の欠陥で荒く扱っても爆発しないものも有るが、万一を考えて、微細な作業で慎重に艦外に捨てる必要が有った。そういう意味では、水中で長く息が続き、手先も器用で、尚且つ、そこが死に場所になる覚悟をして、落ち着いて作業が出来ることも必要だ。自惚れかも知れないが、この艦の乗員では冷静に考えてもそれは自分が適任だろうと林は思った。「爆発すれば、また、兵が死ぬ。命令でやるのではない。自分が適任だと思うからやるんだ。自分でやる気持ちにならないと、現場での知恵が湧かないぞ。」林は重ねて自分に言い聞かせた。そして、水中での作業場面を頭の中で想像しながら、兵士食堂横の自分のロッカーに向かった。

◇　十月九日　午前十時五十分　特務艦　早鞆　艦尾甲板

「お帰りなさい、林一等兵曹。会議の結果はどうでした。」長尾上等兵が幾分心配そうに聞いてきた。
「うん、クレーンで魚雷を取り外して艦の外に捨て、ついでに戦死した三人の遺体も回収することになった。」林が答えた。
「それで、その処置は水兵科がやるのですか。」
「いや、俺がやる。」
「え、他には誰が。」
「俺だけでやる。」
「そんな、無理ですよ。」
「いいんだ。変な奴を絡ませて魚雷を爆発させたくないし、戦死者も汚物みたいに扱いかねない奴らに冒涜させたくない。長尾、悪いがクレーンからロープを垂らし、それを引き上げる手助けを頼む。」
「それは良いですが、何が有ったんです。」
「言えば虫唾が走るが、わずか百六十名ほどの組織で、みんな自分の立場しか考えていないのが気に食わん。」
「将校連中ですか。」
「艦長もだ。艦長は予備役大佐の再招集組だから、ここを出されたら、後はどこかの島の陸戦隊指令官で戦死でもするか、いずれにしても死地に放り込まれるのは目に見えている。海軍省には睨まれたくないから、西山中尉のわがままもわかっていて見過ごし、何も言わない。今回の俺の役目も、戦死した吉積の為に林が自ら志願してきたという美談の筋書きで、万一に不発魚雷が爆発して艦が損傷しても、情にほだされて許したが、それは乗組員の士気高揚のためでも有ったという話にするだろう。二宮機曹長にしても四期下の俺がすぐ下の立場まで来ていて、酒保の件も有って井上主計大尉が俺を随分評価しているから、自分を守るためにはどこかで潰してしまいたいというのが本音だろう。今回は損傷個所の機関科の責任者である機械長として作業全体の指揮を取り、上手く行けば作業を指揮した自分の手柄、上手く行かなければ現場で作業をした林のミスという図式を描いている。」
「ひどい話ですね。」
「しかし、そんなことより、先ず不発魚雷の処理だ。下手なことをすると艦が沈没して、全員泳いで陸を目指すことになりかねない。陸地まで四十キロ以上はあるぞ。」

「冗談はやめてください。」
「時間が無い。すぐに作業にかかるぞ。」

◇ 十月九日　午前十一時十分　特務艦　早鞆　水中の艦尾鋳鋼板損傷個所付近

林は裸になり、先ず損傷個所の状況を視認で確認する為、損傷した艦尾鋳鋼板まで素潜りで近づいた。

念のために、海流に流された時を考え、腰には艦尾から垂らした命綱を結んでいる。魚雷は鋳鋼板が爆発した時にできた裂け目をこするように刺さっていて、最後尾のスクリュー部分がその裂け目に引っかかる形で止まっていた。魚雷の先端は二番目の隔壁の手前一メートルにまで迫っていたが、壊れた鋳鋼板が捻じ曲げられてほぼ並行になった部分に魚雷本体が器用に乗っかっている。問題は、爆発で毀れた鋳鋼板の一部が魚雷の上部を塞ぎ、その鋳鋼板の下に曲がった部分が横から挟み込む様に魚雷を押さえていることで、斜め上方に少しずつ引き上げたなら、なんとか信管に触らないように引き上げられそうだが、魚雷を艦外に動かせるようにするには、最初の何分かはクレーンの微妙な操作が必要に見えた。

再浮上すると、水中作業とクレーン操作台との中継点として、鋼台(魚雷などの防御網を下に垂らす装置)が艦尾に移動されており、長尾上等兵の顔が見えた。

「さすがに段取りが良いな。」林が長尾に呼び掛けた。

「荷下ろしが本業ですから、この艦の水兵は大砲をぶっ放すより作業の段取りを考えるのが余程得意ですよ。」長尾が軽口で応じた。

「今すぐ上がる。」声を掛けて、林は垂れている縄梯子で鋼台まで昇って行った。

「クレーンは誰が操作するんだ。」林が訪ねた。

「広井兵長に頼みました。クレーン操作の名人ですよ。」

「では、三人で話そう。」

艦尾に移動させたクレーンの操作台の前で、水兵科の広井兵長が待っていた。

「林だ。よろしく頼む。聞いていると思うが、不発魚雷の艦外放擲作業だが、今現場を見てきた結果として、三段階で行いたい。先ず、魚雷を動かせるようにするのが第一段階。この時の作業は一寸や五分といった微細な作業が必要になる。細紐で合図をするから、グッと一回引いた場合は五分刻みで引き揚げてくれ。トントンと二回引いたら、一寸ほど緩めて欲しい。第二段階は魚雷を、今の挟まった位置から艦外まで移動させる。第一段階が上手くいけば、艦外への移動は、ほぼ真っ直ぐに移動させるだけで上手くいく筈だ。第三段階は魚雷を海底に捨てるだけだが、そのまま続けて落とされたのでは、魚雷が爆発した衝撃で俺がやられるかも知れないから、俺が鋼台に上がるまで待っていてくれ。要は第一段階が勝負だな。合図の紐は絡まないように長尾を鋼台に置いて、中継してもらうから、長尾を良く見ながら操作してくれ。それと、魚雷を縛るのはチェーンではなくロープにする。チェーンだと引っ張った時に、瞬間的に強い衝撃を与えかねない。ロープ自体の伸縮で衝撃を和らげたい。後は念のために言っておくが、二宮が上官面して何か言ってきても、海中と連絡が取れませんからと言って、相手にするな。」

「わかりました。それで、潜ったままの作業ですよね。一回でどれくらいの時間、作業できます。」広井が林に尋ねた。

「三分といった所かな。」林が答えた。

「三分もですか。」長尾が聞き返した。

「小さい時から素潜りでサザエを採ってきたからな。まあ、三分くらいなら、何回か続けても問題は無い。五分を超えると、これは危険信号だ

な。ひょっとすると俺自身を引き上げてもらうことになる。十一時半から作業を開始する。いいな。」林が二人を見ながらニャっと笑った。

◇ 十月九日　午前十一時三十分　特務艦　早鞆　水中の艦尾鋳鋼板損傷個所付近

林は、海水パンツの上に上下の体操着、足にはズック靴を履いて鋼台で待っていた。「裸のほうが動きやすいが、さっき潜った時に膝を鋳鋼板の破断面で少し切ってしまった。」林は長尾に言った。「魚雷とダンスをすると、切られ与三になりかねないからな。」と言い足し、命綱を腰に、長尾に相図するための細紐は先端を輪にして左の手首に縛り付け、鋼台から海面にダイブした。そして、クレーンの先端から海面に下がっている、魚雷を引き上げるための二本のロープの先端を持ち、伸びあがって大きく息を吸い込むと、真っ直ぐ下に向かって潜水していった。

三分後、林が再び姿を現した。

「今の処、順調だ。クレーンからの吊り下げ用のロープをピンと張るまでゆっくり引き上げてくれ。ロープは魚雷の先端三分の一の所と、末端のスクリュウの箇所に括りつけた。舷側から垂直に引き離す角度でロープを引き上げるように、広井兵長に伝えてくれ。」

「了解。復唱します。」と長尾が返事し、広井兵長に聞こえるようにそちらに顔を向けて、林からの指示内容を復唱した。

広井がクレーンを操作したのか、弛んでいた吊り下げ用のロープがピンと張った状態になり、スクリュー部位の側のロープが三十センチほど上になった。「そこまでだ。」林が怒鳴った。

広井にも聞こえたのか、クレーンの動きが止まった。

「魚雷先端側のロープだけ、すこしずつ上に引いてもらうぞ。これからが正念場だ。その前に、クレーンの先端を三尺ほど船体から外に突き出して、そこで止めてくれ。」言い捨てて、林は再び潜水していった。

三十秒後、相図の細紐にグッと引き上げる合図が有り、上手く伝わったのか、クレーンが微妙に動いた。それからも、引き上げと緩める合図が不連続で続き、潜水から三分半が経過した時、林が再び姿を見せた。

「もう少しだ。後少しで魚雷を動かせる。長尾、ドンゴロスを一枚、投げ落としてくれ。」

言われたように、長尾は荷下ろし用の麻袋(通称ドンゴロス)を海面に投げ落とした。

それを掴むと、林は「今度はもう少し長くなるかもしれんぞ。」と言って、潜って行った。

水面から二メートルほどの場所に、魚雷は挟まっていた。林はドンゴロスを魚雷の先端を覆うように巻き付け、最先端部には触れないように注意しながら、相図の細紐をグッと引っ張った。そして、魚雷を下から支えるように踏ん張り、再び引き上げと引き下げの合図を繰り返した。単調な作業が三分ほど続いた後、魚雷の先端部がふっと船体の破断面から離れた。

林は慌ててドンゴロスを下に引き、魚雷が破断面の上部にぶつからないようにしようとしたが、一瞬、カンという音が響き、魚雷が船体の破断口に接触した。林は一瞬、目をつぶったが、頭の中で「エエイ!」と気合を入れて、そのまま、魚雷を押し出す様に船体を脚で蹴った。

「広井兵長、魚雷が艦から離れました。」長尾が広井に向かって叫び、再び水面に目を移した。

魚雷に続いて林の姿が見えた。しかし泳ぐ様子はなく、そのまま仰向けに浮かんで、水面に静かに浮かんだままで止まった。

「林兵曹殿!」長尾が大声で呼んだが、返答が無いまま、林は浮かんでいた。長尾はあわてて、海面に飛び込み、林の頭の下に手を指し添えた。

「大丈夫だ。少し疲れた。」林が仰向けに浮かんだまま、大きく息を吐いてつぶやいた。

「心配しましたよ。最後は五分以上、潜っていましたよ。」
「新記録かな。休憩したら、吉積たちを引き上げるぞ。」
林と長尾が鋼台に上がり、そこで暫く息を整えていたら、遥か下の水中から投棄した魚雷の爆発音が響いてきた。「今回も命拾いをしたな。」林は自分の幸運がまだ続いていることを知った。

しばらくして、林は甲板まで昇り、クレーンの操作台にいる広井兵長に話しかけた。
「ありがとう。お蔭で上手くいったよ。」
「林兵曹殿こそ、本当にお疲れ様です。しかし、常人技では無いですね。感服しました。」広井が驚きを隠さずに林に話を返した。「都合で合わせて二十分余り、最後の時は五分半くらい潜っていましたよ。普通なら、立派な土左衛門ですよ。」
「作業開始からざっくり三十分か。しかし、まだこの後が有るが、少し休憩だ。」
「もう、誰かに代わってもらった方が良いですよ。本当に。」広井が真顔で林に言った。
「魚雷は下手をすると死人が出るから、俺が引き受けた。多分、この艦で潜る息は、俺が一番続くからな。それと、吉積たちの遺体は、本当に戦死した三人を哀悼する気持ちで触れる者じゃないと、遺体を処置する権利はない。だから、俺が潜る。」林が静かに答えた。
「本当は軍艦旗で包んで、引き上げてやりたいが、長谷部艦長なら、多分、そこらに有るドンゴロスに包んで、引き上げることになるだろう。名誉の戦死と言っても、詰まる処、水死体だからな。だから、命令で作業をやる奴は、普通なら触るのも嫌がって、ぞんざいな扱いをしかねない。それじゃ、余りに三人が可哀そうだ。せめて、葬式で友達が棺桶を担ぐように、例えドンゴロスの棺桶でも、俺が丁寧に引き上げてやるよ。」林が幾分重い口調で答えた。

「ところで、二宮は姿を見せたか。」林が広井に尋ねた。
「作業が始まってすぐ、何をトロトロやってるんだ。さっさとチェーンでも巻いて、一気に引き上げろ。」と言うんで、「そんなことをしたら魚雷が爆発して、この辺りにいるものも無事じゃ済みませんよ。」と返しました。そうしたら、何も言わずに艦橋の方に向かいました。
「相変わらずだな。自分が指揮を執ると言ったから、顔を出さない訳にも行かないので様子を見に来たんだろうが、どうせ艦長には順調に進んでいますとでも報告したんだろう。手柄顔でな。」林がうんざりしたように言った。そして、「広井兵長、悪いがあと少し付き合ってくれ。十二時半から三人を引き上げる。遺体をドンゴロスにくるんで引き上げるだけだから、三人で十五分も有れば終わるだろう。頼むぞ。」
「喜んでお手伝いしますよ。」広井が明るく答えた。

◇ 十月九日　午後零時三十分　特務艦　早鞆　艦尾損傷個所付近
「広井兵長、長尾上等兵。最後の仕上げだ。よろしく頼むぞ。補充兵から引き上げて、最後に吉積兵曹を引き上げる。上官は部下の安否を見届けてから退避するのが鉄則で、吉積なら、そうしたいだろうから。」言い置いて、林は左舷の鋼台に向かった。
「変わった人というか、ブレない人だなあ。」広井兵長が長尾の顔を見て言った。
「そうですね。慣れないと扱いにくい人の気がしますが、情に厚い良い人ですよ。」そう言い置いて長尾は林の後を追い、鋼台にスタンバイした。

◇ 十月九日　午後零時四十分　特務艦　早鞆　水中の艦尾鋳鋼板損傷個所付近

魚雷処理から三十分ほど休憩し、再び林は潜水を始めた。

今度は魚雷の時のような爆発の危険はないので、余裕を持って作業が出来た。広井や長尾との連携も、お互いに相手の反応や力量が判っているので、手慣れた仕事をやっているようなものだった。

最初に補充兵の一人を引き上げた。魚雷の爆発の衝撃で頭を打って意識を失ったまま水死したのか、身体には特に目立った損傷もなく、眠っているような死に顔だった。

林は、本来は自分の部下として今も勤務していたであろう見知らぬ補充兵に水中で合掌し、ドンゴロスの中に遺体を運んだ。やはり、引き上げるのはドンゴロスに入れるようにと指示された為、せめてもの弔いで身体を伸ばしたまま中に納められるように、大きめのドンゴロスを三枚用意させた。頭を上にする形で、足下から履かせるようにドンゴロスの袋を引き上げ、入り口を固く縛った。そして、横泳ぎでドンゴロスの袋の結び口を引っ張りながら、魚雷の爆発で空いた破裂口を遺体と添うように抜け出し、クレーンからのフックを袋の結び口に引っ掛け、自分は一度、海面に浮上した。

海面に出てみると、舷側にはいくつも顔が並んでいて、艦長以下の士官連中も揃っているようだった。「暇な連中だ。他にすることはないのか。」と林は心の中で毒づきながら、広井兵長への合図として、クレーンから降りているチェーンを一度、強く下に引いた。

クレーンは遺体を十分な高さまで引き上げた後、右に九十度旋回して遺体を後部甲板に下ろした。水兵科の兵隊が数人、遺体を取り囲み、軍艦葬の為の準備を始めた。広井兵曹はクレーンのフックを袋から外してもらい、次の作業のため、クレーンの位置を元の場所に戻した。林は引き続き、疲れも見せずに、次の遺体の引き上げの為に潜水した。

二人目の補充兵は爆発の衝撃か、右足が折れていた。そして一人目よりも明らかに、かなり歳を重ねている容貌だった。林は家には奥さんや子供もいたかも知れないなと想像し、最近、再召集された十歳ほど年上の叔父の顔を想い浮かべた。「残された遺族は可哀そうだな。」と思うと、水中で合掌する手に力がこもった。

同じ手順で二番目の遺体も甲板に送り、最後に吉積の番となった。吉積兵曹は死ぬ時も意識が有ったのか、険しい顔つきで死んでいた。林は「悪かったな、吉積。」と頭を下げ、手で両眼を閉じさせ、マッサージをするように顔を整えた。「お前の母さんには俺が出来るだけの事はする。成仏できないと言わずに、安らかに浄土に行ってくれ。」合掌しながら、林は吉積に別れを告げて、船体の破裂口まで遺体を運んだ。この破裂口を出れば、後は手順通りに軍艦葬を行い水葬されることとなる。艦橋前に遺体を運べば、遺族でもない一介の下士官の林に出る幕は無くなる。

「吉積、もう少し付き合ってくれるか。」林は心の中でつぶやきながら、小学校の時のことを想い出していた。「奉安殿」の掃除を命じられた時、飾られていた写真を「どこのおっさんの写真だ。」と言って笑ったら、二人して監督の教師に力いっぱい平手打ちを食ったこと。校庭の二宮金次郎の銅像を見て「本気で薪を集めて背負っているなら、あんな涼しい顔で本なんか読む余裕がある筈がない。こんなの、実際に山で薪集めをしたことの無い、苦労無しのやつが考えることだ。」と言ったのを、運悪く同じ教師に聞かれ、「お前ら!!」と追いかけまわされたこと。吉積の通信簿素行欄のマイナス点は、かなり自分の責任だったと林は改めて吉積に謝った。もっとも俺もお前の悪さに付き合わされて…などと考えているうちに、息の苦しさを通りこして、林は意識が朦朧としてきた。

「まずい。」林は慌てて破裂口を潜り抜け、すぐに海面に浮上し、息を継いだ。

鋼台から長尾一等兵が「林兵曹! 林兵曹!」と声をからして叫んでいた。舷側に見える顔は一様に「何が有ったんだ。」という顔付で下を見ている。
長尾は鋼台から林の横に飛び込み、「大丈夫ですか。待たせ過ぎですよ。」と心配顔で林を覗き込みながら、身体を支えようとした。
「吉積の袋をクレーンのフックに懸けてくれ。ここで俺が勝手に水葬にしたら、吉積に化けて出られる。」
「もう、心配させないでください。」長尾は安心したのか顔が弛んだが、それでも林を支える手はそのままにしていた。

◇ 十月九日　午後一時十分　特務艦　早鞆　後部甲板
乗組員のほぼ全員が後部甲板に集められ、戦死者三名の軍艦葬が始まった。
早鞆は任務柄、戦死者を出すのはこれが初めてだった。昨年の八月にも同じように米国の潜水艦の攻撃を受けたが、船体をわずかに損傷した程度で済み、負傷者も出ていなかった。そういう意味では、今日は乗組員全員が戦争を真剣に意識する日となった。
遺体は艦橋側を頭に、並ぶように三つドンゴロスの袋が並べられ、遺体の顔が見えるように袋の口を捲り、袋を隠すように上に軍艦旗が懸けられていた。
ラッパ手が「海行かば」を吹奏し、全員が唱和した。
内務の分隊長中村中尉から戦死者三名の略歴の報告が有り、名誉の戦死に対して三名の昇進を海軍省に申請する旨が告げられた。
形通りに長谷部艦長から弔辞と全員に対する訓示が行われ、乗組員の中にいた坊主上がりの兵隊が、「般若心経」を読経し、全員が手を合わせて礼拝をした。林は「吉積は浄土真宗なんだが。」と、言えばまた怒られそうなことを考えていた。
その後、甲板の右舷に全員が移動し合掌する中で、順番に遺体を一畳ほどの板に載せて海中に滑り落とし、葬儀は終了した。

◇ 十月九日　午後一時五十分　特務艦　早鞆　後部右舷機関室
「本当にお疲れ様でした。林兵曹。」長尾上等兵が昼食代わりに二人分の握り飯を運び込み、「やっと昼飯にあり付けますね。」と話しかけた。「正直、疲れた。」林も放心したように返事をしたが、「しかし、タラカンまでの段取りを操舵の連中に確認するまでは、まだ休めないからな。お前もいつまでも俺に付き合っていると今後も碌なことがないぞ。」林は冗談か本音か判らない口調で長尾の顔を見た。
「操舵室のことまで気にかかるとは、何とも兵曹殿も貧乏性ですね。」長尾上等兵が目じりを緩めて言葉を返した。
林はニコリともしないで「機関も吉積がいれば安心して任せるのだが、機関科総員六十九名の内、あと使えるのは佐藤くらいか。」と言った時、「お呼びですか。」と佐藤三等兵曹が機関室に顔を出した。
「おお、来たか。用意が出来次第、すぐに機関を再始動してタラカンに向かう。知っての通り、左側の機関が使えないから、右側の機関だけでの方肺走行だ。出ても六ノットというところだが、航路を陸地にあまり近付けるとマカッサル海流に反流する沿岸流に邪魔されて着くのが遅くなる。航路の件は俺が操舵室に念を押しておく。何とか夜の七時前にはタラカンの港に接岸したい。後は左側の機関室にこれ以上の問題が起こらないように、随時、見張っていて欲しいから、別途その為の要員も確保してくれ。どうせ接岸すれば、二三日は機関室要員に仕事はなくなる。それと、長尾は朝から俺に付き合って疲れているから、機関の運転要員が揃ったら、上がらせてやってくれ。」言い置いて、林は艦橋に向かった。
「相変わらず、忙しい人だ。」佐藤が林を見送りながら言った。「みんな詳しくは知らないでしょうが、朝からの魚雷と遺体の始末は林兵曹殿が

一人で片付けたようなものですよ。本当にタフな人です。」長尾が林を擁護するように佐藤に言った。

午後二時過ぎに、早鞆は機関を再始動させ、タラカンに向かった。

◇ 十月九日　午後七時　オランダ領東インド　タラカンの波止場

早鞆は無事にタラカンの港に接岸した。ここはオランダ領東インドの有力な石油の産出地で早鞆は石油の積み込みの為に、過去に何回か寄港したことが有った。また、石油の積出港である関係から、寄港する船舶の簡易修理をする施設が有るが、いずれにしても早鞆の修理は明日以降の話だった。

林は直属上司の二宮曹長に了解を取り、今日は早めに休むつもりで、食堂でその日初めての普通の食事を取っていた。そこに井上大尉からのお呼びがかかった。

◇ 十月九日　午後八時　特務艦　早鞆　士官宿泊室

林は主計長の井上大尉に呼ばれ、士官専用の宿泊室に出向いた。ここは井上と軍医長の石垣大尉との二人部屋で、部屋の小さな机にウィスキーのボトルが置かれていた。

「ご苦労だったな、林。」井上大尉が林に話しかけた。「仕事は片付いたか。」

「推進機関の修理は明日からかかります。ちょっと長引きそうです。ところで、酒保の件で来てほしいとの伝言が有りましたが。」林が直立したまま答えた。

「まあ、そこのイスに腰かけろ。ここには俺と石垣大尉しかいないから、ゆっくり休め。食堂でも良かったんだが、あそこだと色んな奴がいて、それこそ、別の意味でうるさいからな。」井上がもう既に飲み始めていたのか、少し赤味がさした顔で答えた。

「吉積たちに献杯していたんだ。」軍医長の石垣大尉が言い添えた。お前は吉積とは幼馴染だったらしいから、どうせなら一緒に献杯してもらおうと思ってな。」井上大尉が盆に伏せていた杯を林に差し出した。

そして自分の杯を軽く上げ、「献杯。」と言いながら眼で林に飲むように促した。

「林は酒を飲まんというが、飲めないのでないことは良くしっている。本当はお前の慰労が目的なんだ。今日はまあ、俺に付き合え。」井上がウィスキーを飲み干しながら、言葉を続けた。「吉積は気の毒だったが、ここも戦場だからな。」

「はい、覚悟はしています。元々は二人共、昨年の十一月にソロモン海で沈んだ霧島に乗っていましたから。」林が返答した。

「そうか、霧島の機関兵はほとんどが戦死したそうだな。」井上が続けた。

「艦が沈む時には、艦の底にいるのが仕事の機関兵はまず助からないと覚悟しています。私も転属がなければ、一緒に死んでいたでしょう。」林が言葉を続けた。

「今いる艦で、部下たちが死なないように守ってやるのも、お前の役割だな。」井上が言った。

「それはもっと上の人の役目でしょう。」林が言葉を返した。

「林一等機関兵曹。お前は仕事が出来る。そして、考えもしっかりしている。今日もお前が泥をかぶる仕事を一人でやったようなものだ。体力も含めて、たいしたものだと思っている。」井上が続けた。

「お前の眼から見たら、この艦の上の連中のやってることなど、自分の都合しか考えていなくて、人の上に立つ立場の者のすることでは無いと思えるだろうな。」更に井上が言葉を続けた。

「酔っているのですか。」林が話をそらした。

「わかっているよ、林。だから今日、お前を呼んだ。人は上に昇るにつれて少しずつ良い景色が見えてきて、もっと上に、もっと上にと欲が出る。そして、失敗を恐れて無意識の裡に保身に廻る。お前は性格からして、そうはならないと思うが、自爆はするな。お前ひとりなら、例えこの艦を放り出されても、自分で何とかやっていくだろう。しかし、残された部下はもっと大変になるぞ。」

「今度は説教ですか。井上大尉。」林が井上を直視して答えた。

「説教ではなく、助言だよ。林兵曹。」横から石垣大尉が言い添えた。

「井上大尉はお前を評価している。だから、もっと上の立場になるように応援したいと思っている。私もそうだ。残念ながら、二人共、お前の直属の上司ではないがな。」石垣が言葉を続けた。

「戦争はまだまだ続く。この艦ももっと危ない場面に出会うことになるだろう。そうした時に現場で部下を守れるのはお前のような奴だ。だから、自重して欲しい。今までのお前は不満を押さえて、黙って縁の下の仕事をして来た。確かに不満を言葉にはしていない。しかし、態度に不満が現れている。もったいない話だ。お前が文句を言いたい相手は、言葉にこそしないが、お前の言いたい事が自分の欠陥を突いていることを意識している。しかし、それが解りつつも反撃してくるぞ。相手にも自分の論理が有るし、防衛本能が働くからな。」

今度は井上が付け足した。「長谷部艦長にも不満は有るだろうが、ものは考えようだ。あのおっさんのように、部下に何も言わない上司は、それはそれでやり易いものだ。これが雁字搦に締め付けられて、それも納得できない方針を押し付けて来るような上司だと、部下は精神的に潰されてしまう。勝手に泳がせてくれる上司は、それはそれでやりやすいものだ。」

「その為に、全体の統制が取れなくて、士官連中それぞれが勝手なことをしていてもですか。軍隊がそれでは、部下は無駄死にします。」林が反論した。

「勿論、限度は有るさ。」今度は石垣が代わって言った。「この艦はそこまで腐っていない。ヤバくなると、流石の艦長も自分の色を出す。今日も西山を呼んで、叱りつけたはずだ。他人には見えないようにな。二宮のい加減な所も、おっさんは良く判っているよ。」

更に井上が付け足した。「林、もう少しの我慢だ。次に昇進したらお前も曹長だ。昔で言う特務少尉だ。良いか悪いかは別にして、軍隊で士官と兵とでは権限が大きく違う。士官になれば例え一番下でも立場が変わる。艦長にも直言できるし、自分の担当範囲ではかなりの権限を持つ。だから、やけだけは起こすな。」と言いつつ、井上は林の杯にウィスキーを注ぎ足した。

「もう一杯飲めば、今日はこれで帰れ。ちょうどウィスキーも空になる所だからな。俺たち二人はお前を応援している。それだけは伝えたかった。だから、今晩お前に来てもらった。」

計算していたかのように、ウィスキーの瓶は空になりかけていた。二人の話に納得をした訳ではなかったが、林は二人が自分を心配し、好意で話してくれていることは良く分かった。そして、今の自分のもやもやした気持ちを早いうちに解消させるつもりで呼び出したのも理解できていた。「貴重なお酒、有難うございました。」直接的な礼は別の時に言おうと思いながら、林は頭を深々と下げ、直立で敬礼をして士官室を出た。

水兵部屋に帰りながら、林は二人の大尉のことを改めて考えてみた。軍隊は典型的な階級社会で、自分のようなたたき上げの兵隊が士官になっても、兵学校上がりの新米の少尉よりも下に置かれる。元からの士官である二人は、良い人だがそれも、一人は軍医、一人は主計畑という言わば傍流で、だからこそ普通の兵隊を普通に見られる余裕が有るのだ

とも思えた。俺は士官になっても、そして何処まで上に行っても、兵隊の気持ちから抜け出せないし、脱け出したら自分は潰れるだろうなと、林は思った。

水兵部屋に帰りながら、長尾の顔を想い浮かべた。「長尾、今日は良くやってくれたな。」林はつぶやきながら、長尾たちを守るためにも、二人に言われたように、お前はもう少し我慢を続けるしかないんだぞと心の中で自分に言い聞かせていた。

いつの間にか時刻は九時近くになっていて、南国とは言え港に吹く風が頬に心地よかった。そして、西の空からは白い半月が戦場には無縁の穏やかな光を地上に降り注いでいた。

林安憲　まだまだ未熟な二十七歳と一ヶ月の兵士の、長かった一日がやっと終わりかけていた。

（エピローグ）

特務艦早鞆はタラカンで応急修理を行った後、バリクパパンでの修理を経て昭和十九年一月に、ようやくシンガポールのセレター軍港に到着した。その後、セレター軍港でも続けて修理を行ったが、推進機関は結局戦闘航海に従事できるレベルにまでは回復せず、インドネシアのリンガ泊地で連合艦隊の諸艦艇に対する補給業務のみに専念した。その後、昭和十九年十月にセレター軍港に再帰港し、英軍のシンガポール奪回作戦に備えて、ジョホール水道を封鎖する為の防壁となる任務を命ぜられ、（これについては第八章に記しています。）昭和二十年の敗戦を迎えることになる。

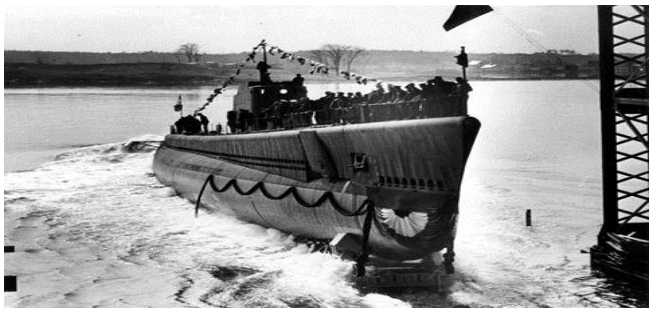
潜水艦キングフィッシュはこの五回目のパトロールを無事に終えた後、南シナ海から小笠原近海まで、日本軍相手の輸送路破壊任務を更に七回重ね、日本の敗戦まで潜水艦としての任務を無傷で全うした。

この二つの艦が、その後の戦場で再び　まみえることは無かった。

（第七章　了）

【キングフィッシュ　基本性能】

排水量（水上）1,526 トン、（水中）2,410 トン
全長　（水線長）93.6m、（最大長）95.02m
全幅　8.31m　　吃水　6.2m
機関　10 気筒 ディーゼル　4 基、
　　エリオット発電機　　2 基
最大速度　水上 20.25 ノット
　　水中　8.75 ノット
航続距離　11,000 海里（10 ノット時）
試験水深　300ft　（90m）
乗員　　戦時　80～85 名
兵装　25 口径 5 インチ砲　一基
　　40 ミリ機関砲、20 ミリ機銃、
　　21 インチ 魚雷発射管　10 基



（米国海軍潜水艦　キングフィッシュ）

【編集後記】

▶ 昨日、ロシアが侵攻しているウクライナの４州をロシアに編入する声明を発表しました。２月下旬の侵攻以来、すでに丸７ヶ月以上を経過した「特別軍事作戦」は、ウクライナ側の攻勢により、いよいよ長期戦の様相を呈しています。

映画「サウンド・オブ・ミュージック」で見たヒトラーの侵略を、今、プーチンがそれをなぞり、さらに悪質なことには、「核の脅威」をちらつかせる中で、自らの主張を押し通そうとしています。

▶ 愚生もいわゆる「戦争を知らない世代」ですが、第二次大戦の終結からはすでに 77 年が経過しました。そして、その間に世界中で色々な「戦争」が起こりましたが、直接に戦闘を経験した人間は、世界のどの国でも、絶対的な少数派の存在です。その為、声高な「愛国心」のプロパガンダがどんな危険性を伴うものなのかという事に対して、世界中が「リアルな認識」を持てない状態になっています。結果、アジア・アフリカの新興国はもとより、欧米の各国でも「極右」政治勢力の伸張に見られる様に『排外主義』が勢いを増しており、違う意味で「もはや戦後ではない」状況が出現していますし、日本の政治状況や風潮もまた、それと「軌を一にした」ところにいます。

▶ ところで、3 ページの「BS 通信」の紹介でも触れましたが、今回の BS 通信は『会員の投稿』として、「小説」を掲載いたしました。たまたま、「太平洋戦争に従軍した一兵士」の生涯をテーマとした作品ですが、愚生も自分なりに、「戦争」に対する想いを再整理してみたいと思います。

また、今後の BS 通信の発行に際しては、「会員の投稿欄」を一つの柱として編集していきたいと考えていますので、皆様からの積極的なご投稿をお願いいたします。

勿論、ジャンルは問わず、以前に何人かの会員からご頂戴した「政治・経済」に関わる論文から、紀行文・詩歌などの文芸作品まで、どんな種類の作品でも結構ですので、事務局宛にご連絡を賜り度存じます。

いつの間にか「閉塞感」が高まっている今の世の中に対し、少しでも「明るさ」や「やる気」を取り戻すお手伝いができる「誌面」を創れればと考えています。

（片断知崇徒）